
【書評】

Françoise Dastur, *Déconstruction et phénoménologie : Derrida en débat avec Husserl et Heidegger* (Hermann, 2016)

宗利風也

1. 概要

本稿で取り上げる『脱構築と現象学——フッサールとハイデガーと論争するデリダ』は、著者が1992年から2014年のあいだに発表した七本のデリダに関する論文を、加筆修正した上で再録したものである（なお、本書からの引用は括弧の中に頁数を記す）。そのうちの一本（「差異の問い」）はすでに翻訳されており、インターネットを介して誰でもアクセスできる¹（この論文からの引用は、先の頁数に続けて邦訳の頁数を記す）。

著者フランソワーズ・ダストゥール（1942-）は、フランスとドイツの現象学を専門としている。また、学生時代に講義を受講して以来、長年にわたってデリダとの交流があった人物でもある。こうした経緯から、本書では、著者自身の学生時代の講義ノートや、著者自らがデリダから受け取った未刊行の講演録も（若干ではあるが）参照されている。しかし著者は、このようにデリダとの交流がありながらも、デリダを鼻息することなく、公平な目線でその現象学解釈の正当性を検討している。

2. 具体的な内容

本書に収録された七本の論文は、デリダの読解対象ごとに三つのパートに分けられており、その内訳は、「デリダとフッサール」が二本、「デリダとフッサールとハイデガー」が二本、「デリダとハイデガー」が三本となっている。それぞれの主題は、「フッサール・有限・反復」（一本目）、「現前・死」（二本目）、「神学・レヴィナス・痕跡」（三本目）、「ハイデガー・時間・歴史」（四本目）、「ハイデガー・差異・戯れ」（五本目）、「ハイデガー・動物論」（六本目）、「ゲシュレヒト・ガイスト・散種・結集」（七本目）となっている。

現象学の専門家が執筆した本書の特徴は、前期デリダによるフッサール・ハイデガー解釈の難所を簡明な記述をもって解明し、時にはその解釈の不備を批判する点にある。また、本書で扱われるデリダのテキストは、『声と現象』や『グラマトロジーについて』を始めとした代表的なものが多く、新資料を解説するというよりかは、主要なテキストを丹念に読解するという手法をとっ

¹ フランソワーズ・ダステール「差異の問い——デリダとハイデガー」宮崎裕助・松田智裕訳、『知のトポス』第12号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、2017年、91-131頁（<https://niigata-u.repo.nii.ac.jp/records/29460#.YdWHEi2MtQI>：最終閲覧日2022年1月10日）。

ている。

それぞれの論文の内容を、本書に収録された順番の通りに、簡単に紹介しよう。

一本目の「フッサールとデリダの有限と反復」は、デリダの修士論文である『フッサール哲学における発生の問題』（以下『発生の問題』）から前期の代表作である『声と現象』に至るまでのフッサール解釈を時系列順に分析しながら、デリダのフッサール解釈の変遷を整理するものである。まず、著者によれば、『発生の問題』においてデリダは、フッサールの発生論のうちに事実性と超越論性の混交を見出していた。次に、「幾何学の起源」序説（以下「序説」）において、この混交をハイデガーの存在論へと接近させることで、「存在の意味の絶対的基礎の現れという必要性」（26）から「有限性」を論じ、また、「理念的対象に永続的な存在を受ける」（31）ために「エクリチュール」が要請されると主張した。最後に、『声と現象』において、エクリチュールにおける無限な反復に関する分析を通じて、「[...] 現在が反復そのものに由来する」（34）と論じていた。このように本論文は、ハイデガー存在論への接近とエクリチュールに関する思考の練り上げによってデリダ思想が変化していった過程を記述することに成功している。

二本目の「現前の問い——『声と現象』読解」は、『声と現象』において展開される現前の形而上学の脱構築を分析することで、デリダの「死」という難解な主題を的確に解明するものである。著者によれば、『声と現象』においてデリダは、フッサールの『論理学研究』における独話が現在の自己同一性によって可能になっていると解釈する。そしてデリダは、この現在の自己同一性において知覚と把持・予持という非知覚とが共属しているために、「主体の自己への現前において他性がある」（43）と主張する。このデリダの議論における著者の関心は、他性が「死という他性」（50）と結びつけられている点である。デリダは、フッサールの『論理学研究』において、直観が言述を理解するために欠かせない構成要素となっていないことから、私と発するためには私の死が必要となる、と敷衍している。このとき著者は、現在と非現在が共属しているように、「生は死とともに構成されていなければならない」（59）と主張する。本論文の独自性は、デリダの死の議論をハイデガーのそれと比較して、両者の差異を明瞭にした点にある。つまり、死は、ハイデガーにとっては現在を与えるものであるのだが、デリダにとっては現在を分解するものとなるのである（60）。

三本目の「脱構築と神学」は、初期から後期のフッサール論とハイデガー論を分析しながら、デリダが一貫して神学的な主題を論じていたことを明らかにするものである。まず著者は、前期デリダがフッサールの読解を通じて神という主題を論じていたと主張する。「序説」においてデリダは、神は歴史を超え出たものであるのだが、神性と結びつけられたイデア性は主観に直観されるという逆説について論じていた。著者によれば、「暴力と形而上学」や『グラマトロジーについて』を経て、この逆説に関する思考が脱構築へと結びつくのだが、この変遷においてレヴィナスの「痕跡」概念が与えた影響は大きい。というのもデリダは、そこに潜む「ユダヤキリスト教的な伝統」（75）を排除しながらレヴィナスの痕跡概念を自身の思想に組み込むことで、後期の主題となる「メシアニズムなきメシア的なもの」という思考の母体（72）を形成したからである。またデリダは、「差延」論文から後期に至るまで断続的に、差延と否定神学の関係を論じていたの

だが、著者は「ここにもレヴィナスの痕跡の思考が再び見いだせる」(249)と主張し、実際に「いかにして語らずにいられるか」に痕跡概念が登場することを明らかにする。このように本論文の特徴は、デリダの神学論の変遷を追いながら、レヴィナスの「痕跡」を見出した点にあると言える。

四本目の「時間、歴史、脱構築」は、脱構築が「思想家に着手された操作や行為」ではなく、「歴史的なプロセス」(86)であることを主張するものである。まず著者は、デリダが、フッサールの時間意識において過ぎ去った現在の把持と現在の知覚が共属していることから「主体の自己同一性の中には、現在と現前化の条件である他性が存在する」(89)と主張していた点を確認する。著者の関心は、デリダの論じる時間の内実にある。ここで著者は、デリダがハイデガーの論じる根源的な時間からの通俗的な時間概念の「落下」を批判していることを挙げる。そして、デリダがこのように根源的な時間を批判していることから、「時間の連続的な流れという形では歴史を思考することは[...]できない」(105)と主張する。つまり、デリダにとっての歴史とは、構成する時間をそれによって構成された時間から遡ることでは探求できないという「逆説的な歴史」(102)なのである。そして、この歴史において、目的論的な終着点は設定されていない。こうして著者は、そこには過去も未来もない「ノマド的な放浪」(105)だけがあると結論づけるのである。

五本目の「差異の問い」は、「差異」を主題として前期デリダのハイデガー読解を分析することで、両者が標榜する「戯れの根拠の不在」(135/113)における差異を析出するものである。先述の通り、本論文にはすでに翻訳があり、そこに訳者たちによる的確な要約が付されているため、ここでは評者の気づいた範囲で本論文の独自性を指摘しよう。それは、デリダが重視しなかったハイデガーのケーレを際立てている点にある。著者によれば、デリダはハイデガーの「破壊」が現前者の現前性を思考することへと導くと主張しているが、これは誤りである。というのも、ケーレを経て以降、存在の退隠が強調されるため、「それ以前は可能であったとしても、存在を純粋な現前性と考えることはまったく不可能となる」(128/106)からである。この批判の妥当性は措くとして、ハイデガーのケーレを強調する著者の読解は、デリダだけではなく、デリダ以前のフランス現象学におけるハイデガー解釈を検討する上でも重要な視座となるだろう。

六本目の「「秘密の」動物論のために——あるいは、動物についていかに語らずにいられるか」は、本書の中で最長の論文で、『精神について』第六章において展開されるハイデガーによる動物の記述への批判について検討し、その正当性と射程を問うものである。デリダは、『精神について』において、ハイデガーが人間と動物とのあいだに人間を優位とするヒエラルキーを作っていること、そして、その思想体系において動物との共存を思考できないことを批判した。著者は、このデリダの批判を検討するために、大部分の頁を割いて、『精神について』では参照されていない1929-1930年の講義(『形而上学の根本諸問題』)を丹念に分析する。ハイデガーは、動物が衝動(Trieb)によって順次突き動かされるものだと考えた。この連続的な衝動において、「動物は、人間と同様に、それ自身のうちに「囲われて」おらず、他者との関係が不可能なのでもない」(147)。このように動物は、衝動が「抑止解除(Enthemmung)」されることによって環境へと開かれる。し

かし、この開かれは、存在への接近可能性としての世界への開かれではない。この世界へは有限な人間の現存在のみが目を向けることができるのであり、このような人間との対比においてのみ「動物は世界に貧しい」と言われる。そのため、著者は、確かにデリダの指摘する通り人間と動物のあいだにヒエラルキーが存在するが、それは「形而上学的な人間主義」によるものではない、と主張する。また、著者は、ハイデガーが人間に対して動物より神の方が深遠であって、人間と動物とは深淵によって隔てられると述べた箇所に注目している。というのも、この主張を敷衍すれば、動物を「絶対的な〈他者〉」(171)と解釈できるからである。この点から著者は、ハイデガー思想の内側においても動物との共存は思考可能であって、この点でデリダの解釈を却下している。なお、付言しておけば、本論文の初出は1995年であるため、デリダの最晩年の動物論(例えば『動物を追う、ゆえに私は〈動物〉である』)は参照されていない。とはいえ、本論文におけるデリダとハイデガーの比較は両者の思想の核心に迫るものであるため、それを検討する際にも有益であるだろう。

七本目の「ゲシュレヒトとガイスト——デリダ、ハイデガー、トラークル」は、「ゲシュレヒト I～III」や『精神について』等の分析から、デリダの「散種」とハイデガーの「結集」というモチーフを対比させながら、両者の思想の差異を鮮やかに描き出したものである。著者は、デリダがハイデガーのトラークル論に現れる「ゲシュレヒト」と「ガイスト」という語をいかに読解したかを通して、この差異を明らかにする。著者によれば、ハイデガーは、性、種族、家系等を意味する多義的な語である「ゲシュレヒト (Geschlecht)」というドイツ語を、性差や種差といった複数性を残しつつも「その複数性を結集するある一」(213)をもつものとして使用している。つまり、ハイデガーの「ゲシュレヒト」において、多様な差異を結集させ統一する一が重視されるのであって、複数性は二次的なものに過ぎないのである。著者は、デリダがハイデガーの結集を批判し、あらゆる結集を拒絶する散種という思想を展開したと主張する。「デリダにとって、意味論的な統一は存在しておらず、単に、様々なコンテキストにおいてのある記号やある標記の使用が存在している」(217)。次いで著者は、デリダとハイデガーの差異が「ガイスト (精神)」というドイツ語をめぐっても起こっていると指摘するのだが、ここで注目すべきは、デリダが「ガイスト」という語の統一的な起源を想定しているという著者による批判である(227)。デリダは、ハイデガーが「ガイスト」を論じるとき、古代ギリシア語とラテン語とドイツ語のみを扱い、ヘブライ語を除外していることを批判している。しかし、著者は、ハイデガーと同様に、デリダもインド・ヨーロッパ的な西洋しか考慮しておらず、その影響の外にある文化圏(例えば日本語圏や中国語圏)を除外していると指摘する。この指摘は重要だと言えよう。

3. デリダ研究としての観点から

本書に収録された七本の論文は、参考文献に挙がっているのを目にすることが多く、すでに古典的な研究としての地位を得つつあると言っても問題ないのではないだろうか。このような本書の魅力は、「有限」や「差異」といったデリダの基本的な主題を、単にデリダの言葉を繰り返すのではなく、フッサールやハイデガーの思想体系と照らし合わせながら分析することで、デリダ思

想の核心をクリアに提示した点にある。また、メルロ＝ポンティやレヴィナスの著作も頻繁に参照し、フランス現象学というより大きな視座の中でデリダを解釈している点も評価されるべきであろう。そしてとりわけ、デリダとハイデガーとを比較した箇所には参考にすべき主張が多いように思われる。その中でも、著者によるデリダのハイデガー読解への批判は重要なもので、デリダとハイデガーとの関係を再考するヒントを与えてくれるだろう。

以上の点から、本書はデリダ研究として十分に参照する価値のあるものだと言える。しかし、全ての研究がそうであるように、議論が不十分に思える箇所も存在する。それを二点指摘することで、本稿を終えよう。

一点目。本書は、確かにハイデガーに関してはデリダの参照していないテキストまでもを讀解しており、丁寧に分析しているのだが、フッサールに関して同様であるとは言い難い。その中でも時間論の解釈には解決すべき問題が生じているように思われる。著者は、現象学において現在において現前と非・現前との共属が起こっているというデリダの主張を、生き生きとした現在における原印象と把持との共属から説明している。しかし、この解釈は正しいと言えるのだろうか。フッサール研究者であるザハヴィが指摘する通り²、把持されるものはたった今過ぎ去ったものであるのだが、把持において与えられるのは、たった今過ぎ去ったものの体験である。そのため、フッサールによる原印象と把持の分析を参照するだけでは、デリダの主張の内実を解明できとは言えないのではないか。

二点目。前期デリダの読解に関してはテキストが丹念に分析されているが、後期デリダに関しては、読み落とされている主題が少なくない。例えば、「脱構築と神学」において「いかにして語らずにいられるか」が参照されているが、著者の関心は否定神学と痕跡との関係にあり、そこで論じられる「祈り」や「約束」といった後期の概念について分析されていない。確かに、後期においても神学と痕跡が結びつくという点は重要だと言えるが、それが後期の思想に与えた影響についてまで踏み込んで論じるべきだったのではないだろうか。なお付言しておけば、実際にこの点については多くの著作で論じられている³。

² Dan Zahavi, *Self-awareness and Alterity: A Phenomenological Investigation*, Evanston, Northwestern University Press, 1999, p. 86.

³ 例えば、以下の著作では、デリダの「宗教的転回」をめぐって繰り広げられたカプートとヘグルンドとの論争を参照しながら、デリダの神学論に新たな光を当てている。Clayton Crockett, *Derrida after the End of Writing: Political Theology and New Materialism*, New York, Fordham University Press, 2017.